

問題意識・背景

駅のプラットフォームと車両乗降口には旅客の円滑な乗降と列車の安全な走行に支障しないような一定の段差・隙間が設けられているが、車椅子利用者等が乗降する際には渡り板が必要となり、駅員等の介助なしに単独で乗降することができない場合がある。

一方で、2020年東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機として、多くの車椅子利用者等の円滑な移動を可能とするため、介助なしでも単独で列車を乗降可能なプラットフォームとすることが望まれている。

このため、平成30年10月に、学識経験者、障がい者団体、鉄道事業者等からなる検討会を立ち上げ、実証試験等を通じて検討を行った。



単独乗降可能へ

実証試験

(平成30年12月13日)

模擬駅ホームに留置された列車の扉前に模擬的な段差・隙間を設定し、車椅子使用者(23名)に協力いただき、様々な車椅子による列車の単独乗降の可能な段差・隙間の数値の組み合わせを調査。



ホーム・車両の現状

東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会において、競技会場へのアクセシブルルート上にある駅及びその乗り換え等に利用される首都圏の主要駅(322駅、番線数868)について、プラットフォームと車両乗降口の段差・隙間に関する現状について調査。

とりまとめの方向性(調整中)

- ◆ コンクリート軌道部・プラットフォーム直線部・車両の構造条件等の違いが少なく条件の良い箇所において、車椅子使用者が単独乗降しやすいよう、優先的に整備を進め、段差・隙間を縮小することが望ましい。
 - ・ 列車の走行における安全面の配慮を踏まえ、段差・隙間縮小の目安値の組合せは●cm、●cm。
- ◆ 上記の整備にあたっては、単独乗降しやすい位置等について、車椅子利用者に対し分かりやすく情報提供する等、ソフト対策と組み合わせた対応が必要。
- ◆ 異なる規格の型式の車両が混在する路線の場合は、車両床面とホームの逆段差にも考慮しつつ、計画的に車両床面高さが統一されるよう、対応可能な車両更新に取り組む必要がある。

対策例



くし状ゴム(隙間の縮小)



ホームの嵩上げ(段差の縮小)